

近世京都図の特性

大学院文学研究科・文学部教授 金田章裕

1. 中世の平安京図

京都は平安京として建設されて以来、1200年以上にわたって都市として連続的に展開してきた点で、日本の都市の中でも希有な存在である。従って、その都市図についても、日本では最も早くからの歴史を有している。

鎌倉時代に書写されたものと推定されている九条家本の『延喜式』には、巻43, 左京京職の部分に「左京図・右京図」が付されている。鎌倉末から南北朝ごろの有職故実の書である『拾芥抄』もまた、類似の地図類を収載している。『延喜式』図と同様に平安京の街路・邸第などを描いた左・右京図は、「東京図・西京図」と題されている。

この『拾芥抄』の東・西京図と同様の地図で、より詳細な内容を有した仁和寺蔵京都古図の存在も知られており、『拾芥抄』図よりやや古い13世紀初頭を下らない時期以前の成立にかかわる。

これらの中世の平安京を表現した地図の直接的な起源は不明であるが、いずれも平安京の基本計画に基づく左・右京の範囲の街路網と主要施設・邸第を標記しており、古代的要素を基礎



としていることは確かである。

16世紀ごろの京都は、左京域を中心とした洛中と、その周辺の辺土ないし洛外からなり、洛中洛外と併称することで実質的な市街の全体を表現することが多く、やがていくつも作成された絢爛たる洛中洛外図屏風がその全貌をよく示している。

2. 黎明期の近世京都図

洛中洛外図と総称される鳥瞰図様式の図ではなく、平面の地図様式の京都図のうち、近世最古のものとして知られているのは、元和6, 7年(1621, 22)か寛永元年(1624)作製と推定されている四曲一雙の屏風図であり、市街の表現

法は『拾芥抄』図などと酷似している。

手書き図としては、次いで洛中絵図と称されている縮尺1500分の1の実測図が著名である。これは、寛永20年(1643)ごろに京都所司代の命によって作製されたものであり、道路の幅員まで記入された巨大な地図である。『拾芥抄』図などと異なり、方形方格の平安京のイメージを踏襲してはいないが、洛中のみを対象としている点では、前代の地図の基本姿勢と軌を一にしている。

この間、京都では江戸・大坂に先がけて都市図の刊行も始まった。「都記」(旧称寛永平安町古図)と記された地図が、わが国最古の現存刊行都市図であり、寛永元年~3年ごろの刊行とみられている。北は一条通りから南は七条通りまで、東は寺町から西は二条城西側ないし壬生大路付近までを表現しており、街区を黒く刷り出している。この図の外形は厳密な方形とはなっていないが、御土居が描かれておらず、表現範囲や表現様式は『拾芥抄』図などと類似のものとなっている。

「都記」のように、街区を黒く表現するのは、初期の刊行京都図に共通する様式であり、17世紀中ごろまで続いた。ただし、「都記」以後の刊行京都図は次第に表現の範囲を広げ、周辺に洛外の寺社の絵を配置するようになる。刊行年・版元を明記した京都図としては現存最古のものである慶安5年(1652)山本五兵衛刊の「平安城東西南北町並之図」は、その嚆矢である。

「都記」と同様の様式を保ちつつ、東を鴨東の六波羅、西を新設された島原の「けいせい町」、北を相国寺付近まで市街の表現範囲を広げ、周囲に50以上の有名寺社を絵画的に描いている。つまり、京都図に洛外が出現し、観光地図としての性格を帯び始めていることになる。

3. 林吉永による京大絵図の大成

京都図が伝統的な左・右京図の影響を脱するのは、17世紀末のことであった。京都図の刊行

は、江戸図のそれと同様に極めて盛んであり、日本の都市図刊行の二大拠点となった。

林吉永は江戸中期の京都を代表する書肆であり、大型の手彩色京絵図の刊行で一時代を画した。

林吉永の初印本は、貞享3年(1686)刊の「新撰増補京大絵図」であり、それまでの京都図の墨刷縦長の様式ではなく、東西を横に広くして洛中洛外共に表現を詳細にした。それまでの地図において墨色で充填されていた街区を白抜きにし、その区画内にまで情報を記入し、また洛中洛外の表現の一体化と、著名寺社や名所について加えられた地誌的記載も大きな特徴である。さらに図の南端付近には、当時の京都市街における中心的位置であった一条札辻(一条室町付近)から主要な町・寺社などへの里程が記されるなど観光地図としての機能を充実し、京大絵図の一つの完成した画期的様式を示している。

この様式は、林吉永自身によってさらに推進され、寛保元年(1741)には、「増補再板京大絵図」と題したさらに大型の木版手彩色の京都図を刊行した。この図によって京大絵図は一つの頂点に達した。同図は、「北山より南三条迄」と「北三条より南伏見迄」の二枚に分割され、町並や道筋、主要屋敷名、寺院の宗派などが詳細に記載されている。御土居に囲まれた洛中を8分1町(5000分の1)の縮尺とする一方、周辺の洛外部分の縮尺を縮めて図中に盛り込む様式は貞享3年刊「新撰増補京大絵図」と同様である。ただし、同図の改訂版開版以来、道程の起点は「一条札辻」から「三条大橋」に移っており、「増補再板京大絵図」では、図の南端付近に、三条大橋を起点とする距離・方角を方位円盤の形で示している。また、以前にも図中に記号を記入し、その説明を周辺に一括していたが、同図では独立した形の諸大名の京屋敷一覧表を付すなど、記述内容も極めて豊かで充実したものとされている。

4. 小型・中型ガイドマップ、内裏図の盛行

林吉永の京大絵図は、室内において周囲からのぞき込む形で利用され、鑑賞にも耐える見事な出来映えであるが、実際に京の見物に携帯するには大きすぎる版型である。18世紀には、名所旧跡の観光や寺社参詣が流行し、『都名所図繪』のような挿絵によって説明した観光案内書が出版されるような趨勢の中で、林吉永自体も一方で、小型・中型の携行可能な京都図を刊行した。ただしこれらは、街区を墨刷りで表現する旧来の様式のものであり、京大絵図に見られるような先進性は乏しい。

携行用小型図では、正本屋吉兵衛による安永3年(1774)刊の「懷宝京絵図」が、それ以前の墨刷りした上に手彩色を施す一般的な手法ではなく、色版木と合羽刷りの技法を用いており、京都図では最初の色刷り図である。18世紀の京都図では、このような小型図の盛行が大きな特徴であり、中小版元の活動も目ざましいものであった。

天明7年(1787)刊の「早見京絵図」は、「あらし御見物の御方様」用に赤線を入れて京都早見コースを示している。安永7年(1778)菊屋長兵衛刊の「改正両面京図名所鑑」は、縮尺16000分の1の分間図であり、裏面に名所案内を印刷している。文化8年(1811)の初版以来半世紀に及ぶロングセラ-となった竹原好兵衛刊の「都名所自在歩行」も、裏面に名所案内が印刷されている。同図は洛中部分について東西の縮尺を南北より小さくし、東西に圧縮した体裁の図面とし、携帯に適した形を考案している。

ところで、慶長12年(1607)に京都所司代板倉勝重の下で整備が始まった公家町は、京都の都市構造を特徴付けるものであり、内裏図ないし公家町図も京都ならではのものである。延宝5年(1677)林吉永刊の「新改内裏之図 御紋入」は、内裏と公家町を含む一帯を描いた現存最古の刊行図であり、禁裏・仙洞御所などの建物を絵画的に表現し、公家屋敷と紋所・公家名を標

記したものである。この様式は、後に数多く出版された公家町図にも踏襲され、とりわけ幕末の文久・慶応期に、世情を反映して集中的に刊行される。

5. 竹原好兵衛による多色刷大絵図の刊行

林吉永によって大成された京大絵図が木版手彩色であったのに対し、江戸時代後期の版元竹原好兵衛は、型紙による京染めの手法を用いた合羽刷りによって、多色刷大絵図を刊行した。その代表作である天保2年(1831)刊の「改正京町絵図細見大成」は、山・川・街路のあざやかな配色と詳細な表現に特徴がある。洛中のみならずその周辺部をも縮尺5000分の1で統一し、精度の面でも林吉永版の京大絵図との相異を鮮明にしている。しかもその縁辺の部分では、縮尺を次第に小さくして多くの名所旧跡を描き込むなど、随所に工夫が凝らされている。同年の出版目録に「大々図 京都絵図の冠にして其のくはしきことこれにまされるはなし」と自ら記す自信作であり、幕末まで30余年も版を重ねた。

同図のいま一つの特徴は、図中の地誌的記述が少ないことであるが、恐らくは、多色刷図としての特色を前面に出すためと、一方では書物の形での名所案内記や、前述のような裏面に解説を付した携行用図の盛行にみられるような機能の分化が進んでいた結果であろう。竹原好兵衛自体がこのような携行用小型図をも出版している。また、竹原好兵衛刊の多くの京都図の考訂は、在京の書家で多くの国絵図の出版にも関わった池田東籬亭(1788-1857)が行っており、図中に明記されている。

竹原好兵衛版の色鮮やかな京絵図は、他の版元のものを抑えて最も広く流布し、19世紀中期から幕末にかけての京都を代表する版元となった。

6. 明治初期の京都図

江戸時代後期の京都図刊行を代表する竹原好

兵衛に代わり、明治時代に入って政府の御用書肆となったのは、村上勘兵衛や石田治兵衛らである。明治初期の京都図は、観光用のものとは別に、行政的な地図に特徴付けられる。明治2年（1869）京都市中は三条通りを境とした上・下京の二つの大組と、その下の町組からなる組織に改編され、新しい町組ごとに小学校が創置された。明治初期の京都図には、幕末の京絵図を基図とし、それに明治の行政区画を重ね合わせたものが多い。

明治9年（1876）村上勘兵衛刊の「京都区分一覧之図」は、中でも大型で特徴的である。市街とその周辺を縮尺10000分の1とし、町組を5色の彩色と番号で区分、一覧できるようにした上で、さらに洛外縁辺を著しく縮小して表現する手法を採用している。しかも、用紙は和紙であるが、銅版印刷を採用したものである。

日本では木版印刷がよく発達していたが、江戸時代末ごろから銅版印刷が導入され、京都図ではまず小型図が刊行され、やがて明治時代に入り、前述のような大型京都図も刊行されるよ

うになる。

一方では、鳥瞰図風に表現した観光図が数多く出版されるようにもなった。

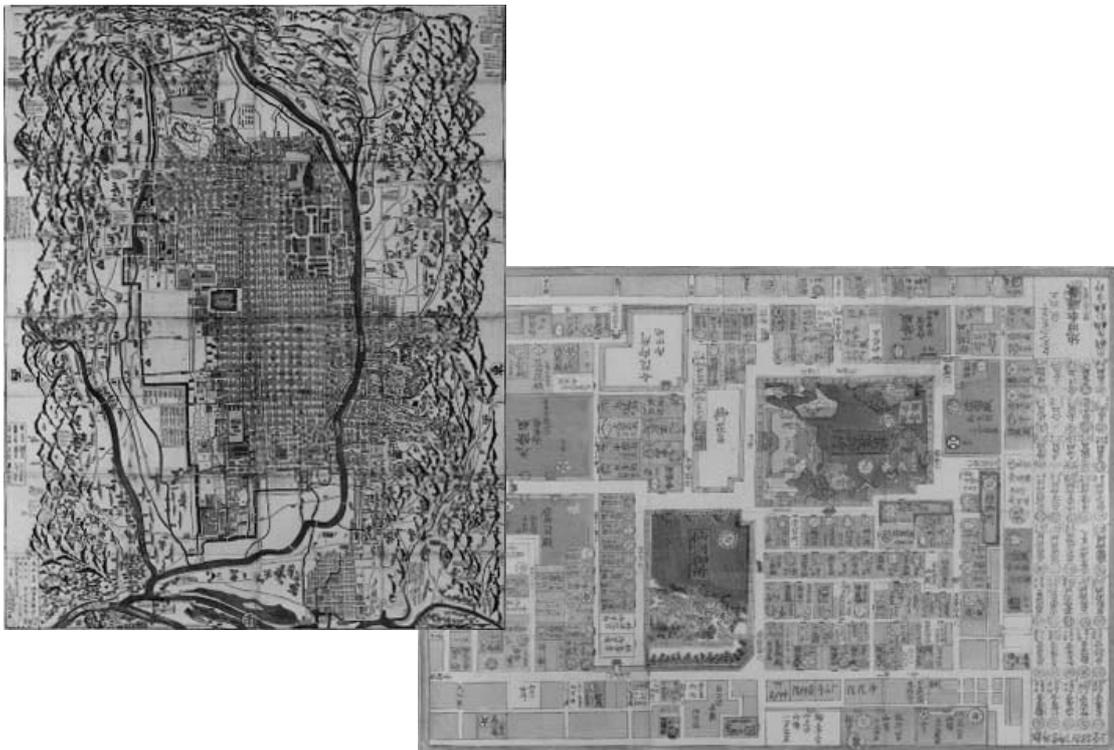
7. 大塚京都図コレクション

大塚京都図コレクションは、大塚隆氏収集による、近世から明治にかけての刊行京都図の唯一の体系的なコレクションである。平成12年度に大塚隆氏により、京都大学附属図書館に寄贈され、この名称で収蔵されることとなった。ここに述べたような京都図の特徴を余すところなく伝え、かつ今後の研究の重要な資料となる貴重なものである。

[参考]

金田章裕「左・右京図と京大絵図」、『古代荘園図と景観』東京大学出版会、1998年、
京都大学附属図書館編・刊『近世の京都図と世界図』2001年

（きんだ あきひろ）



『天正遣欧使節肖像画』人物名異同のことなど

附属図書館情報サービス課雑誌特殊資料掛長 松田 博

天正年間、キリスト教巡察使アレシャンドロ＝ヴァリニャーノの勧めにより、九州の大友宗麟、有馬晴信、大村純忠のキリシタン三大名は、四名の少年を使節として他の随員二名とともにローマ教皇のもとに派遣した。案内役の神父メスキータをはじめとした一行は、1582（天正10）年2月20日長崎を出航し、インドのゴアを経て1584（天正12）年8月10日リスボンに上陸し、その後ポルトガル・イスパニアを経て、海路イタリアに上陸、1585（天正13）年3月22日ローマに入った。当地で大歓迎を受けるとともに、翌3月23日ローマ教皇グレゴリオ十三世に謁見している。

この、当時13歳～14歳の少年がそれぞれ命がけで数年を費やし海外にわたったという驚異的で画期的な出来事、あるいは教皇の未曾有の謁見は、ヨーロッパ諸国にたいへんな衝撃と反響を与え、それだけに使節や日本に関するたくさんの出版物が刊行されたのである。その一つに、三大名の書簡の紹介をはじめゴンザレス神父の紹介演説、ボッカバズリ神父の答辞、使節の旅行等について触れた『Acta Consistorii pvblice Exhibiti a S.D.N. Gregorio Papa XIII. Regvm Iaponiorvm Legatis Romae, Die XXIII. Martii. M.D.LXXXV....1585.』があるが、これはイタリア語版『Breve Rilatione del Consistoro(sic) pvblico, Dato a gli Ambasciadori Giaponesi dalla Santita di Papa Gregorio XIII. in Roma, il di 23. di Marzo 1585.』、ドイツ語増補版『Zeitung, Welcher Gestallt, im Martio dieses fünfveindachtzigsten Iars, ; etlich König vnd ... 1585.』等をはじめ1585年中に十六版ものものが各地で刊行されたようである。この『日本使節グレゴリオ十三世謁見記』は、京都大学には経済学部上野文庫に前記三種ともが所蔵されて

いる。翌1586年には、遣欧使節に関する詳細な報告書でもある『Gualtieri, Guido 『Relationi della Venvta degli Ambasciatori Giaponesi a Roma sino alla partita di Lisbona...1586. 』』が刊行されているが、附属図書館サトウ文庫にはローマ、ヴェネチア、ミラノ(1587年)で刊行のものが各一部、経済学部上野文庫にはローマ刊のものが二部、ヴェネチア刊のものが一部のそれぞれ所蔵がある。『グワルチェリ『遣欧使節記』』をはじめ使節に関する書物の刊行は、『Boscaro, A. 『Sixteenth century European printed works on the first Japanese mission to Europe....1973』』によれば、1585年中だけでも四九種を数えたという。附属図書館にはこれら以外にも『Newe Zeyttung auss der Insel Japonien... 1586.』、通称『天正遣欧使節肖像画』(以下『肖像画』)と呼ばれるものが所蔵されている。

この『肖像画』は、第十一代総長濱田耕作(青陵)博士が、1930(昭和5)年オランダのナイホフ書店から購入・旧蔵していたものを、1952(昭和27)年子息の稔氏より京都大学附属図書館に寄贈されたもので、ドイツのアウグスブルグで印刷された木版画である。標題には『日本からの新聞』とあり、上部3行の記事末尾に「7月25日ミラノ到着、8月3日出発の日本王侯使節四青年の来往」(1)との記述がある。中央には案内役兼通訳のメスキータ神父が、その周りを取り囲むように四名の使節の肖像画が描かれている。『肖像画』は原寸大の桐箱に納められ、上面は厚手のガラスで覆われて保管されており、箱内側には、「本肖像画は先孝が昭和の初年和蘭ナイホフ書肆より求め愛蔵していたものですが 此度そのゆかりの京都大学図書館に寄贈し 以て学術研究に資することにし

『天正遣欧使節肖像画』



ました 昭和二七年十一月十四日 濱田 敦書」との墨書がある。

濱田青陵入手のことについて、幸田成友は「博士がハーグの書林ナイホッフから大金を問うて購入せられたものだ。・・・全く稀品には相違ないが、二百五十フロリンとあっては、日本貨が今程下落していなかった当時でも、私共には手が出せず、従って京大の考古学研究室で本図を博士から示された時、自分は羨ましいという私情より、博士が日本の学界のためにこの稀有の一大史料を加えられた特志に対し深く敬意を感じた。」(2)と触れている。なお、この『肖像画』の京都大学への所蔵登録は1954(昭和29)年4月30日、登録番号は968943となっている。

歴史上の一大壮挙である少年使節のヨーロッパ訪問は、現刊のほとんどの歴史書(低・中学年向け歴史図書を含む)に記述されるところであるが、記載に際しこの『肖像画』がたびたび使われている。ところが、『肖像画』の人物紹介について、最近に至るまで異同というが混乱

がみられるのである。例えば『ベッソン氏コレクション 天正少年使節と「原マルチノの演説」』筑波大学附属図書館(1995年)、『宮崎県史通史篇 中世』県史編纂委員会(1998年)などであるが、そこでは左上の人物を千々石ミゲル、右下を中浦ジュリアンとされている。これは明らかに誤りと思われるので、この点について以下に触れ、あらためてその同定を行っておきたい。最初に、これまでのいくつかの刊行物の『肖像画』四少年の異同を一覧しておくとのようになる。

1) 濱田青陵『天正遣欧使節記』岩波書店(1931年4月)

| | |
|---------|-----------|
| 千々石ミゲル | 伊藤マンシヨ |
| (原マルチノ) | (中浦ジュリアン) |

2) 幸田成友「天正遣欧使節の肖像画『学鏡』Vol.43, No.7 丸善(1939年7月)

| | |
|---------|--------|
| 中浦ジュリアン | 伊藤マンシヨ |
| 原マルチノ | 千々石ミゲル |

- 3) 松田毅一『天正少年使節』角川書店
(1965年8月)

| | |
|---------|--------|
| 中浦ジュリアン | 伊藤マンショ |
| 原マルチノ | 千々石ミゲル |

- 4) 海老沢有道『日本キリスト教歴史事典』
教文館(1988年2月)

| | |
|---------|--------|
| 中浦ジュリアン | 伊藤マンショ |
| 原マルチノ | 千々石ミゲル |

- 5) 『ベッソンコレクション 天正少年使節
と「原マルチノの演説」』

筑波大学附属図書館(1995年6月)

| | |
|--------|---------|
| 千々石ミゲル | 伊藤マンショ |
| 原マルチノ | 中浦ジュリアン |

- 6) 『宮崎県の歴史』(「新版県史シリーズ」
45) 山川出版社(1999年9月)

| | |
|--------|---------|
| 千々石ミゲル | 伊藤マンショ |
| 原マルチノ | 中浦ジュリアン |

次に、『肖像画』四少年の同定であるが、これについては幸田成友に先の文章に続けて簡潔明瞭にまとめられているので、少し長くなるがそれを引用して結論づけておきたい。

「然るに去年ミラノ出版ベニヤミノ・グチェレス氏の伊太利における日本最初の使節 Beniamino Gutierrez: La prima ambascieria Giapponese in Italia. Milano, 1938. を見るに及んで、十年の疑團は一朝にして氷解した。グチェレス氏の新著はミラノ市の貴族ウルバノ・モンテ Urbano Monte (壽86歳1647年没)の日記中日本使節に関する本文を摘録し、これを本体として種々の研究を加へたものであるが、同書に挿入せられた四使節およびメスキッタ師の肖像画が独逸版(『肖像画』のこと 筆者)の底本をなすことは、何人も否認し得ざる所であろう。一紙にひとりの肖像を描き、その上段に氏名・身分・年齢・下段に賛美の詞を筆写してある。

人々の眼の周囲が著しく白くなっているから、原図はおそらくは彩色入で、独逸版はこの彩色をも模したのであろう。独逸版には下段の説明中に使節及び神父の名が見えるが、肝要肖像画の下に氏名が無い。神父と使節主席の伊藤マンショとは図柄で想像が附くが、残り三人は不明である。然しグチェレスによると、独逸版上段左が中浦ジュリアン、下段右が千々石ミゲル、下段左が原マルチノである。独逸版では中浦ジュリアンだけが手袋を持っているが、グチェレスによると千々石ミゲルもメスキッタも手袋を持っているのみか、左向きのメスキッタが独逸版には右向きになっている。五人の肖像を一枚に収めて図柄が甘く纏まるようにこの変更を生じたのであろう。」(3)以上であるが、これらの記述から明らかなように、右上が伊藤マンショ、右下が千々石ミゲル、左上が中浦ジュリアン、左下が原マルチノということになる。

ここで、モンテの日記に記されている四名の使節像の説明について紹介しておきたい。ただし、記述内容については、とりわけ出身や身分については必ずしも正確をえていないので、その点を考慮して読むことが必要かと思われる。伊藤マンショについて、肖像画上部の説明は「ドン・マンショ、年齢は二十歳、日向城主の近親で、豊後城主ドン・フランシスコによって派遣された。」とあり、肖像画下段の讚美の詞は「王冠を手にするこの青年は、正使ドン・マンショと呼ばれる。はるかかなたの国より、三年の歳月をかけきたった。しかし、この航海で費やされた日々は決して無意味なものではない。このすばらしきイタリアはもちろん、ローマにおいても、スペインにおいても、ミラノ社会においても、見聞を深め、また親交を深めたからである。」とある。千々石ミゲルについては、同様に「ドン・ミカエル、年齢は十八歳、有馬城主ドン・プロタシオの近親であり、大村の若殿ドン・パルトロメオの従兄弟にあたるが、彼らに派遣された。」、「ここに遣われしも

う一人の正使ドン・ミカエルは、ドン・マンシヨの信頼厚き同行の人であり、深い信仰に支えられ、洗礼をうけてより神に身を捧げしが故に、態度には気品があり、全てに賞賛できる人である。彼が母国に帰りいたるなら、彼の名声は世界を駆けめぐるのであろう。」原マルチノについては、「ドン・マルチノ、年齢は十七歳、日向侯国の有力者である。」、「ここに見ゆるもう一人はドン・マルチノであり、他の使節と全く甲乙つけがたい。彼が深い信仰に目覚めて以来、彼はキリストの崇高さを常に身に持ち続け、上品で、極めて傑出した才能をそなえており、礼儀正しさに満ち、慈愛にあふれている。彼は強い信仰心を持つことのできるひとりであり、信仰の真の援護者である。」中浦ジュリアンについては、「ドン・ジュリアーノ、年齢は17歳、肥前侯国の貴人である。」、「あなた方がここに見るもう一人の青年は、極めて有能なドン・ジュリアーノである。彼が本国に帰りいたらば、彼を賞賛するもろもろの文書は、気高き心の人たちを勇気づけることであろう。彼は、他の使節たちとともに、無比のキリスト教徒に出会うために母国を離れた。そして、他の誰よりも我らの宗教を賞賛しながら、ミラノを出発した。」(4) 以上のような内容かと思う。

最後に、『肖像画』の人物紹介に混乱が生じた要因について考えられるところを少しふれておきたい。何よりも第一の要因は濱田が『天正遣欧使節記』において、左上の手袋をもった人物を正使の一人である千々石ミゲルとしたところにあると思われる。曰く「此の木版画には鬚髯のある僧服の像とが七分身に描かれている。後者の像の右上には赤く染まった耶蘇会の記号があり、これは疑いもなく通訳メスキータ師であろうが、他の四人は孰れを誰と確かに定め難

い。ただ右上の一像は頭巾の外に黄金の冠を持って居り、一行の主席伊藤マンシヨを現はし、従って左上の白い手袋をもっているのは千々石ミカエルを示し、従って下段の二人は原マルチノの中浦ジュリアンの積もりと想像せられないことはない。」(5)と。第二は、濱田と幸田の間には『天正遣欧使節記』の「自序」にみられるように深い親交があり、それ故ウルバノ・モンテの日記についても濱田は情報を得ていたのかもしれないが、その年1938年の春頃から体調を崩し、7月25日に逝去していることから、あらためて筆をとることができなかったと思われる。そんな事情がして『天正遣欧使節記』の記述が濱田の見解として、とりわけ『肖像画』の旧蔵者であっただけに、強く印象づけられたのではないだろうか。以上を紹介しておきたい。

- 1) 濱田青陵『天正遣欧使節記』岩波書店(1931年4月)
ただし、「8月5日」は誤植か
- 2) 3) 幸田成友「天正遣欧使節の肖像画」『学燈』Vol.43, No.7 丸善(1939年7月)
- 4) グチェレスが参照したウルバノ・モンテの肖像画については、Boscaro, Adriana『Sixteenth century European printed works on the first Japanese mission to Europe(Leiden, E. J. Brill, 1973)』および松田毅一『天正少年使節』角川書店(1965年8月)の収録図版を見ていただきたい。
- 5) 濱田青陵『天正遣欧使節記』岩波書店(1931年4月)

(まつだ ひろし)

北米大学図書館訪問記（2） 保存図書館編

総合人間学部整理掛 富岡達治

1. はじめに

今回は、電子ジャーナルを中心に、トロント大学とピッツバーグ大学について報告しました。今回は、保存図書館を中心に、Northern Regional Library Facility（カリフォルニア大学）、Southern Regional Library Facility（同上）、カリフォルニア州立大学ノースリッジ校について報告したいと思います。

2. 保存図書館について

図書館で取り扱う資料は、際限なく増えていきますが、入れ物としての図書館が持つスペースは、限られています。新たに資料を受け入れるためには、現在の資料を廃棄するか、新たなスペースを確保する必要があります。大学図書館の場合、重複や破損・汚損などを除き、廃棄することはほとんどありませんし、集密書架を導入し、高密度化を図ったとしても、既存施設では大きな効果は望めません。

そのため、新築・増築などによる新たなスペースの確保は、以前から図書館の切なる願いでした。また、運用コストの面からは、1つの図書館だけではなく、複数の図書館による共同利用施設も視野に入れる必要があります。そこで、今回は米国での事例をもとに、京都大学ではどうすべきかについて考えたいと思います。

3. カリフォルニア大学(University of California)

アメリカ西海岸のカリフォルニア州は、日本列島がそのままおさまる南北に長い形と大きさです。カリフォルニア大学も、南北に9つのキャンパスが点在しています。これらのキャンパスの共同保存図書館として、北部地区にNRLF（Northern Regional Library Facility）、南部地区にSRLF（Southern Regional Library Facility）

が設置され、利用の少ない資料や貴重資料を最適な環境で低コストに管理するために運営されています。これらの施設は1977年の『The University of California Libraries, A Plan for Development』での勧告に基づいて、設置されました。

SRLFについては、『静脩』Vol.37, No.3（2000.12）にカリフォルニア大学ロサンゼルス校東亜図書館司書のマルラ俊江氏による紹介記事があります。

3.1. NRLF(Northern Regional Library Facility)

NRLFは、カリフォルニア大学北部のバークレイ校（UCB）、デイビス校（UCD）、サンフランシスコ校（UCSF）、サンタクルツ校（UCSC）の4つのキャンパスの資料を取り扱います。NRLFはUCBの北西約16kmのリッチモンドに位置し、UCBからはキャンパスバスが往復しています。1982年に完成した第1フェーズは、事務室、閲覧室と308万冊を収容できる書庫が、続く1990年に完成した第2フェーズは237万冊を収容できる書庫が設置されています。さらに、2001年から2002年には、第3フェーズが完成予定ということでした。敷地は、さらなる増築ができるよう十分に確保されており、最



NRLF

最終的に第6フェーズ、1,800万冊まで収容できるようになっています。

3.2. SRLF(Southern Regional Library Facility)

SRLFはカリフォルニア大学南部のアーバイン校(UCI)、ロサンゼルス校(UCLA)、リバーサイド校(UCR)、サンディエゴ校(UCSD)、サンタバーバラ校(UCSB)の5つのキャンパスの資料を取り扱います。NRLFと違い、UCLAの敷地内に位置します。1987年に完成した第1フェーズは、NRLFと同様に事務室、閲覧室、および350万冊を収容できる書庫が、1996年に完成した第2フェーズにも350万冊を収容できる書庫が設置されており、さらなる増築も可能になっています。

NRLF、SRLFともに、評議会の定める一定の運営金を支払うことによって、カリフォルニア大学以外の図書館であっても、参加することが可能となっています。

3.3. 設備

両施設ともほぼ同様の設備を備えています。書庫は、二重ドアで仕切られており、摂氏約15度、湿度約50%(マイクロフィルムスペースは約30%)に設定されています。さらに、紫外線をカットするフィルター付きの蛍光灯や、何重もの空気清浄装置が取り付けられ、資料保存に最適な環境を維持しています。



書庫 (NRLF)



資料をサイズ別に分けるためのゲージ

資料は、サイズ別(高さ別)に5段階に分けられ、バーコードを貼付して、受入順にそれぞれ配架されます。書架は固定式でしたが、奥行きが約45cmと深く、それぞれの段に2列ずつ資料が配架されていたのには驚きました。このような高密度化の方法をとっても、資料は受入番号順に並んでいるため、探しにくくなることはないとのことでした。また、電動式の集密書架などと比較しても、資料にたどり着くまでのスピードが速く、なによりも低コストで建設できるという利点があるとのことでした。これは広大な敷地を保有しているからこそ可能な選択肢であり、スケールの違いを感じさせられました。

3.4. 受入

各施設に資料を搬入するにあたっては、各図書館はあらかじめ決められたガイドラインに沿った処理をしておかなければなりません。例えば、カリフォルニア大学の総合目録に登録されているか、相当する目録データを提供すること。特別な貸出条件が必要な場合にはその旨を明記すること。状態の悪い資料については、箱に入れるなどの適切な処置をしておくことなどがあげられます。また、できる限り多くの資料を効率的に管理するために、原則として重複する資料は、受け取ってもらえません。

搬入された資料は、サイズ別に分けられ、背表紙にバーコードを貼付した上で目録登録されます。搬入されてから配架までには3~5日を要し、SRLFでは1ヶ月あたり平均15,000冊を受け

入れているとのことでした。

いったん受け入れた資料は、各施設で保存し続けることが望ましいのですが、利用頻度が高くなった場合には、元の所蔵図書館に戻す（Deaccession）ことも可能です。運用開始当時は、その件数も多かったようですが、最近では後述のようにデリバリー体制が充実しているため、減ってきているとのことでした。

3.5. 利用

各施設には来館利用ができるように閲覧室があり、検索用端末やコピー機などが設置されています。しかし、書架をブラウジングしての利用には適さないため、来館利用は非常に少なく、複写・貸出依頼が主となります。

資料は、カリフォルニア大学全体の総合目録システムであるMELVYLや各キャンパスのOPACから検索することができます。複写・貸出依頼は、各キャンパスのOPACと連動し、様々なオプションを指定して、オンラインで依頼できるようになっています。資料は基本的には指定した図書館に配達され、その図書館の貸出規則に則って貸し出されます。依頼を受け付けてから配達までは、同一地区へは2日以内（実質1日）、他地区（北部 南部）へは4～5日以内（実質2～3日）としています。UCLAのOPACシステムであるORION2では、有料ながら実質半日程度で資料が入手できる「ORION Express」というサービスも提供されています。

4. カリフォルニア州立大学ノースリッジ校 （California State University, Northridge）



デルマー・T・オビアット図書館

CSUNは、22あるカリフォルニア州立大学の1つであり、ロサンゼルス市の北西約30kmに位置します。1994年のノースリッジ地震では、大学全体が大きな被害を受けました。訪問時には図書館は復旧していましたが、学内ではまだあちこち工事中で、被害の大きさを痛感しました。

4.1. ASRS

（Automated Storages & Retrieval System）

中央図書館であるデルマー・T・オビアット図書館（Delmar T. Oviatt Library）では、ASRSという自動書庫システムを1991年より導入しています。自動書庫システムは、我が国でも国際基督教大学や明治大学、京都府立図書館などで導入されるなど、徐々に広がり始めています。

自動書庫の基本的な仕組みは、資料をコンテナに収め、クレーンでコンテナごと取り出して出納するものです。ASRSでは、約60cm × 120cmのコンテナを33列 × 34段のラックに収め、それらを12列並べ、書庫スペースに設置しています。そして、6本の通路それぞれにクレーンが配置され、出納依頼に応じて該当のコンテナをピックアップステーションまで運ぶようになっています。

自動書庫の特徴は、資料がどのコンテナに入っているかをシステムが管理しているため、資料の配架場所を固定しなくてよいということです。これは、複数の資料をまとめて入庫（収納）することができ、返却図書を配架するために書架の間をブックトラックを押して動き回る必要がないなど、作業の効率化を図ることができます。また、接架の必要がなく、高層化できるため、高密度化できるということもあげられます。ASRSのラックの高さは12mにもなり、約120万冊の資料を収容することができます。

利用者は、OPACからASRS内の資料を依頼することができます。依頼があった場合、該当のコンテナがピックアップステーションに自動

的に運ばれてきます。オペレータは、画面を見ながらコンテナ内から該当の資料を探し、バーコードを読み取って出庫処理をします。利用者は貸出カウンターで資料を受け取りますが、要する時間は10分以内とされており、多くは5分程度とのことでした。入庫の場合は、空きのあるコンテナが自動的に運ばれてくるため、バーコードを読み取って入庫処理をし、コンテナ内に資料を返却します。

また、自動書庫では、資料の出納利用統計を容易に出すことができるため、年2回以上の利用があった資料は、開架への移動を検討するなどの資料管理にも利用されています。

5. おわりに

はじめにも述べましたが、増加しつづける資料と保存スペースの問題は、図書館にとって大きな課題です。京都大学でも、各図書館・図書室の狭隘化は深刻な問題となっており、早急な対応が迫られています。利用の少ない資料を複数の図書館で共同保存するという保存図書館は、その第一の解決策となります。京都大学では、その建設を平成13年度概算要求として提出しましたが、残念ながら実現には至りませんでした。引き続き要求されています。計画されている保存図書館は、自動書庫システムの導入が考えられており、以下の点で今回訪問した各図書館（NRLF、SRLF、CSUN）の事例を活用していけるのではないかと思います。

- ・施設はメインキャンパス外に建設予定であり、さらに他大学との共同保存図書館とするため、充実したデリバリー体制を整える必要があること。
- ・自動書庫を導入予定であるため、そのメリットを最大限に活かせるような資料管理体制を図ること。

上記2点の大前提として、資料を効率的に検索・依頼できるシステムの開発、および遡及入力の推進があるのは言うまでもありません。ま

た、学術資料の後世への継承という機能も忘れてはいけません。そこに収められるものは知の蓄積であり、図書館がおこなってきた活動の軌跡でもあります。今回、書庫に収められた膨大な資料を前に、あらためて感じました。

最後になりましたが、今回の研修では本当に多くの方々にお世話になりました。心より御礼申し上げます。

（とみおか たつじ）



ASRS

駆け出し図書館員、半年を過ぎて

京都大学附属図書館 情報サ・ビス課 相互利用掛 飯田 智子

京都大学附属図書館に就職して、早くも半年が過ぎました。レファレンスの得意な、専門性の高い頼れる図書館員に、そしてできれば利用者が声をかけやすい職員になりたい。そんな目標をもって仕事を始めたのですが、現実には目先の仕事をこなすのに精一杯の毎日です。また、大学の図書館員を志望した理由の一つに、様々な分野の資料の中に身を置くことで、常に知的好奇心が刺激されるはずだという期待があったのですが、それを感じる余裕もまだありません。まだまだ先の楽しみになりそうです。

私は公共図書館で半年働いていましたが、大学図書館についてはアルバイト経験もなく、実際に働き出して初めてそのシステムを知りました。公共図書館では職員数が少ないため、配架や選書やカウンター当番、さらにはイベントの企画・運営も全職員が関わって行なっていましたが、大学では仕事が細分化されています。そのため日常的に仕事をこなしているだけでは、自分の担当する仕事以外の部分が見えてきません。例えば、配架に行かないので資料の配置場所が覚えられないし、資料の受け入れや目録作り、電子図書館の運営にも完全にノートタッチなので、うっかりすると利用者よりも理解できていないところがあります。部局図書室の様子も、自分が利用者として見に行っただけで初めて知りました。

図書館に対する知識に加えて、さらに専門的な知識の大切さも痛感しています。学術的な単語を知らないために、資料の名前を言われてもその分野が分からなかったり、英単語のスペルミスに気付かないこともあります。当然知っているだろうと利用者が思われる雑誌の略称も、恥ずかしながらまだまだ初耳のものばかりです。また、英語とコンピュータがいるとは聞いて



ていましたが、まさかこれほど必要だとは思いませんでした。この原稿を書いているうちに、勉強しなければならないことをどんどん発見してしまい、非常に焦ってきました。今は回りの先輩職員に助けられながら悪戦苦闘しています。

それでも最近は徐々に周りが見え始めたように思います。準貴重書庫で古い新聞の製本を探す機会があり、手もエプロンも錆色に汚れるし、重いわ錆臭いわでうんざりしたのですが、冷静に考えればあんなに古い新聞原紙を自由に引っ張り出しているというのは、人によっては羨ましい環境なのでしょう。利用者のニーズに直結している仕事なので、やったことには即反応が返ってきますが、もっと資料の内容だとか価値だとかを知っていれば、また違う角度からやりがいを感じることができるのではないかと考えられるようになりました。

私は大学図書館員として京都大学のような大規模な総合大学の、しかも附属図書館という大所帯でスタートをきったわけですが、これを非

常にラッキーなことに捉えたいと思っています。大きすぎて自分がしっかりしなければ、何も覚えないうまなんとなく日常業務で流されてしまう危険がある一方で、欲張ればいろいろなことを吸収できる環境です。勉強熱心な先輩職員に恵まれ、その姿を見ているだけでも刺激になりますし、同じ掛の職員も仕事に手を抜かない人ばかりです。今はまだ支えられるばかりですが、いずれは利用者からも図書館員からも信

頼られるようになりたいです。

デパートも本屋も利用者次第で潰れる昨今ですが、図書館も同じことだと思います。図書館も人間相手のサービス業だということは、公共図書館で身に染み込んだことですが、大学図書館でもそれだけは忘れずに仕事をしたいと考えています。

(いいだ ともこ)

医学図書館が入退館機と閲覧システムを9月より導入

医学図書館では、9月3日より入退館機と閲覧システムを導入し、稼働しています。

1985年以降の外国雑誌の貸出手続きについては、機械で読みとる貸出となり利用者に好評です。京都大学職員証、学生証、医学図書館利用証または附属図書館が発行している図書館利用証のいずれかをご持参ください。

また、医学図書館利用規則も改正され、到着一ヶ月以内の新着雑誌を除く雑誌はすべて24時間以内の貸出となりましたのでご注意願うとともに、年末は12月27日まで、年始は1月5日より開館いたしますのでご利用ください。

映画と音楽を図書館で楽しみませんか

来年2月頃より、附属図書館AVホールにて、映画・ビデオの上映会と音楽鑑賞会を開催します。

図書・雑誌以外にも附属図書館では多くの資料を持っています。その中から古典的名作の映画を上映します。また音楽では故片田清氏より多くの蔵書（現在附属図書館二階閲覧室に配架）と御一緒に寄贈いただいたCDをかけて聞いていただこうと計画しています。勉学・読書に疲れた心と体を癒やしませんか。



平成13年度(2001年度)大学図書館職員長期研修を終えて

法学部整理掛 早川 順子

“図書館は成長する有機体である。”これはインドの図書館学者ランガナタンが1931年に発表した「The Five Laws of Library Science」の第5法則です。大変著名なこの法則は、70年を経ているにも関わらず、今日少しも色あせていません。私は、大学図書館での仕事に従事して以来、特にこの第5法則をよく意識しています。今日での、電子ジャーナルの趨勢やILLの発展の例もこの法則に当てはまると考えています。資料も利用者も、そして資料と利用者の媒介者である職員も皆、図書館の構成一部分であり、成長していくものではないでしょうか。

このように常に変革していく図書館情勢に耐え、かつ推進していく職員の資質の向上を目指して、標記の研修が昭和44年度より、例年、主に国立大学の図書館職員を対象に行われてきました。幸運にも、今年私も33名のうちの一人として、参加させていただきました。

講義の多くは時勢の電子ジャーナルに関連するものでしたが、他大学の事例が存分に伺えました。また、今回は研修場所が東京大学・筑波大学・図書館情報大学・国立情報学研究所、見学先が凸版印刷の印刷博物館・国文学研究資料館・東京工業大学・国会図書館と、多くの施設を拝見できたのが収穫でした。



図書館情報大学情報メディアユニオン

特に新しい機器の備わった施設には、目を見張りました。中でも、図書館情報大学内の今春開館された情報メディアユニオン（愛称ユリス<ULIS>）のICチップゲートと、印刷博物館のヴァーチャル・ミュージアムについては、コンピュータのもたらす未来についてわくわくとした期待を抱かせます。



ICチップゲートの説明

図書を携行してゲートを潜るだけで、貸出記録を執ることも可能。

そして、3週間の研修で多くの知己を得ました。図書館という場は、お互いの技術を教えあって高めあえる、貴重な社会です。企業のように技術を独占することで顧客を確保するという仕組みではありません。今後ユニークな情報を同じ方法で利用できたら、利用者にとってどんなに便利でしょうか。

オリジナルな資料を多く持ち、多数の知見ある図書館職員を抱える京都大学でも、調整された分散主義を維持するというのなら、それぞれの図書館のネットワークをより進化させていく方向へも向いて欲しいと思います。

私は、鮭が産卵の為に生まれた川を遡るように、いつかこの研修に参加し、我が母校図書館情報大学で再び講義を受けることが励みでした。参加が実現いたしましたのも、法学部でのご協力を始め、皆様のお力添えあってこそ、この場をお借りしまして、未筆ながら御礼申し上げます。

（はやかわ よりこ）

全国共同利用研究所図書室として

京都大学数理解析研究所 図書掛長 堤 美 智 子



数理解析研究所図書室の設置年は1963年。京都大学内では若い図書室です。

研究所の特徴の最たるものは数理科学の研究所であると同時に、この分野での全国共同利用研究所でもあるということです。数学は紙と鉛筆があれば後は頭脳と他の頭脳との議論で学問が発展していくと言われていました。現況では昨年度共同利用研究の件数は77件。研究集会参加人数は3,982人。外国からの訪問研究者は205名を数えます。一年間を通じて4千名の人達が数研で77の研究集会を開き、200名以上の外国人学者が長期、短期に渡って数研に滞在して共同研究を行っているという訳です。

研究成果としての出版物も豊富です。プレプリント(学術誌に投稿する前に印刷配布する先刷り)、紀要、研究集会の報告集である『講究録』を研究所として出版しています。

図書室ではプレプリント、紀要を国内外の研究機関と交換し、コレクションを構築しています。プレプリントに関しては書誌・所蔵データベースをRIMSという名前で作成、提供。『講究録』については国立情報学研究所の学術雑誌目次速報データベース構築に参加しています。

数学は理系の文系といわれるように文献が研究上非常に重要視されます。現状では約7万7千冊の単行本と1,319種の雑誌、それにプレプリント約9万冊、レクチャーノート(講義録)を4箇所の書庫に収納しています。図書室は研究所の

3階に位置し閲覧席は20席の小じんまりした図書室です。閲覧室は理学部植物園に面していて四季折々の植物の趣を楽しむことができます。

先にありますように図書室では業務のコンピュータ化が進む以前からデータベースの構築に取り組んで今日に至っています。図書業務がネットワークの上で行われるようになって現在の、閲覧貸出サービスをもシステムに乗せようと現在進行中です。書誌データのNIK(前NACSIS)への登録が80%程度終了。NACSIS ILLによる複写と現物貸借の受付・依頼、図書・雑誌の収書システム処理は実施済みです。書誌データの入力が比較的進んでいる状況があるので、図書貸出・返却システム導入を計画、資料IDラベル添付作業中です。

現行の貸出時、所内の利用者はカウンターに係員が不在でも図書を借り出すことが出来るシステムになっています。新システムには利用者によるセルフ貸し出し・返却も可能との仕様があるらしいので、数研内の利用者には不便にならず、私たち5名の図書室係員にとっては督促、統計などの面で省力化になるだろうとの期待もっています。

学問分野から考えると意外かも知れませんが数学や情報学分野の電子ジャーナルを始めとするデジタル資料に対して数研としての姿勢は非常に積極的であるというわけではありません。プレプリントの交換に関してもプレプリントを電子化し、紙媒体のプレプリントの交換を停止してくる外国の機関も出現していますが、電子資料については保存面で確実な保障はまだ得られていないと思われます。また、提供を受ける側として必ずしもコンピュータを使用できる環境にある利用者ばかりではなく、数研としては“情報弱者を作らない”との信念をもって資料のコレクション・提供に取り組んでいます。

(つつみ みちこ)

平成13年度第1回 京都大学附属図書館講演会の報告 (共催 近畿地区国公立大学図書館協議会)

平成13年9月21日(金)1時半から4時半まで、附属図書館AVホールで標題の講演会が開催された。

テーマは「古文献資料解題」である。講師、演題、内容は次のとおりであった。

礪波 護(京都大学名誉教授)

宮崎市定コレクション「西洋刊の地理書と古地図」

昨年附属図書館に寄贈いただいた宮崎市定氏旧蔵地理書および古地図に関して講演された。この「宮崎氏滞欧採蒐書印」と刻された“西洋刊「中国地誌と古地図」の解題”“宮崎氏の資料蒐集と研究姿勢”“宮崎氏の人となり”について含蓄の深い話をされ、また、地誌資料を通して“資料と図書館の関係”“図書館職員への期待”などにも講演内容は及び、示唆に富む内容であった。

森 洋久(国際日本文化研究センター 助教授)

歴史地理情報基盤の構築について

江戸時代から現代にいたる京都の地図をデジタル化したものを、コンピュータを駆使しながら説明され、古い地図の地名検索や新旧の地図を重ね合わせたりしながら、地図の新しい見方についての研究を報告された。

参加者は94名、14機関(国立大学6, 公立大学4, 私立大学2, その他2)からの参加であり、学生・院生・教官・図書館員・研究者など多岐にわたっており盛会であった。

この講演内容に関連しての御寄稿を、おふたりの先生から「静脩」にいただくことになっているので、ご期待ください。

教官著作寄贈図書一覧（平成13年5月～11月）

今回より寄贈者著作のみの掲載となっております。この一覧以外にも多くの図書をご寄贈いただきました。今後とも蔵書充実のため、ご寄贈いただきたくよろしくお願いいたします。

| 所属等 | 寄贈者氏名 | 寄贈図書名 | 出版社 | 出版年 |
|-----------------|-------|--|---|----------|
| 名誉教授 | 上横手雅敬 | 源平争乱と平家物語 | 角川書店 | 2001 |
| 名誉教授 | 上横手雅敬 | 文のアルバム | 上横手雅敬 | 2001 |
| 名誉教授 | 木村 光 | 生命と環境のゆくえ | (株)化学同人 | 2000 |
| 名誉教授 | 木村 光 | 楽しい研究生活への指針 | 共立出版 | 1999 |
| 名誉教授 | 木村 光 | ゲノム微生物学 | Springer-Verlag Tokyo | 1999 |
| 名誉教授 | 中村 一 | 風景をつくる | 昭和堂 | 2001 |
| 名誉教授 | 山岸 秀夫 | からだを守る | 昭和堂 | 2001 |
| 名誉教授 | 菅原 努 | (シリーズ21世紀の健康と医生物学3) | | |
| 総人教授 | 鈴木 雅之 | 幻想の詩学 | あぼろん社 | 1994 |
| 総人教授 | 鈴木 雅之 | 講座英米文学史2 詩 | 大修館書店 | 2001 |
| 人・環教授 | 小川 侃 | 霧困気と集合心性 | 京大学術出版会 | 2001 |
| 人・環教授 | 小川 侃 | 風の現象学と霧困気 | 晃洋書房 | 2000 |
| 人・環教授 | 西井 正弘 | 国際環境法 | 有信堂 | 2001 |
| 文学部教授 | 間野 英二 | アジアの歴史と文化9 西アジア史 | 角川書店 | 2000 |
| 文学部教授 | 間野 英二 | パープルとその時代 パープル・ナーマの研究4 研究篇 | 松香堂 | 2001 |
| 文学部助手 | 富井 眞 | 先史の観念 改訂版 | 京都大学 | 2001 |
| 教育学部教授 | 川崎 良孝 | インターネットと知的自由 | 京大大学院教育研究科 図書館情報学研究室 | 2001 |
| 教育学部教授 | 川崎 良孝 | 21世紀の図書館を考える | 京大図書館情報学研究会 | 2001 |
| 教育学部教授 | 川崎 良孝 | Public libraries and the Internet | [京都大学] | 2001 |
| 経済学部教授 | 八木紀一郎 | 21世紀の経済社会を構想する | 桜井書店 | 2001 |
| 経済学部教授 | 八木紀一郎 | 経済思想史 | 名古屋大学出版会 | 1995 |
| 経済学部教授 | 八木紀一郎 | 経済学と物理学 | 多賀出版 | 1988 |
| 経済学部教授 | 八木紀一郎 | 現代制度派 経済学宣言 | 名古屋大学出版会 | 1997 |
| 薬学部助教授 | 金子 周司 | 改訂 ライフサイエンス辞書 | 羊土社 | 2001 |
| 工学部教授 | 上林 彌彦 | 2000 KYOTO International Conference on Digital Libraries | IEEE | 2000 |
| 工学部教授 | 上林 彌彦 | The proceedings of the Third International Symposium on Cooperative Database Systems for Advanced Applications | IEEE | 2001 |
| 工学部教授 | 北川 進 | 集積型金属錯体 | 講談社サイエンティフィック | 2001 |
| 工学部教授 | 北村 隆行 | Materials Science for the 21st Century Vol.A,B | The Society of Materials Science, Japan | 2001 |
| 情報学研究科教授 | 岩間 一雄 | アルゴリズム理論入門 | 昭晃堂 | 2001 |
| エネ科学研究科教授 | 笠原三紀夫 | 京都からの提言・明日のエネルギーと環境その続編 | 日工フォーラム社 | 2001 |
| エネ科学研究科教授 | 坂 志朗 | バイオマス・エネルギー・環境 | (株)アイピーシー | 2001 |
| 農学部教授 | 祖田 修 | 農学原論 | 岩波書店 | 2000 |
| 農学部教授 | 祖田 修 | 簡素な生活 | 講談社 | 2001 |
| 農学部教授 | 増田 稔 | 森から樹木へ、樹木から材へ(CD-ROM) | (株)大伸社 | [2001] |
| 人文研教授 | 狭間 直樹 | 梁啓超・明治日本・西方 | 社会科学文献出版社 | 2001 |
| 総合情報メディアセンター助教授 | 藤井 康雄 | 平成12年度 情報処理教育研究集会講演論文集 | 京大総合情報 メディアセンター | 2000 |

目 次

| | |
|--------------------------|----|
| 近世京都図の特性 | 1 |
| 「天正遣欧使節肖像画」人物名異同のことなど | 5 |
| 北米大学図書館訪問記(2) 保存図書館編 | 9 |
| 駆け出し図書館員、半年を過ぎて | 13 |
| 医学図書館が入退館機と閲覧システムを9月より導入 | 14 |
| 映画と音楽を図書館で楽しみませんか | 14 |
| 平成13年度大学図書館職員長期研修を終えて | 15 |
| 全国共同利用研究所図書室として(数理解析研究所) | 16 |
| 平成13年度第1回京都大学附属図書館講演会の報告 | 17 |
| 教官著作寄贈図書一覧(平成13年5月～11月) | 18 |
| 図書館の動き | 19 |
| 目次 | 20 |
| 編集後記 | 20 |

編集後記

今年もあわただしく、駆け足で去っていかうとしております。
新しい世紀が始まった朝には、予想だにできなかったことが次々と起こり、激動の時代であることを痛感しています。京都大学も図書館もしかりです。だからこそ、静情の紙面でもっと図書館の事をお伝えしたいという思いは編集委員一同、感じているのですが、なかなかむづかしいなと思っております。そんな中で、読んでくださってる方からのお手紙は本当に力づけられます。理学部K名誉教授からのお手紙には記事についての感想が書かれており、またT元教官からも静情が読みやすいようにと紙面改善のご指摘を受けました。
皆様方からのご感想、ご意見をお待ちしております。 (C)